

近世畿内農村構造の研究

—和泉国南郡春木村の人口について—

三浦 忍

1. はじめに
2. 春木村人口の趨勢
3. 春木村人口の構成
4. 出生と死亡
5. おわりに

1. はじめに

泉州春木村は和泉国南郡に属し、地理的には和泉国中央部沿海の地である。東西15町22間、南北11町49間、周囲1里12町11間で、明治初年の調査では旧反別73町9反5畝8歩、村高1,359.5385石のこの地方では大村である。支配は最初秀吉直轄地であったが天正15年(1584)小出藩摩守、元和5年(1619)松平周防守ついで寛永17年(1640)岡部美濃守の岸和田入城とともに同氏の蔵入地となった。村高は慶長19年(1614)に866.89石、元和2年809.191石であったが、寛永19年1,109.98石、慶安4年(1655)1,322.047石、享保17年(1726)1,207.655石とされ以後明治2年(1869)迄継続する。

村方支配は一村を南方、北方および浦方に三分割し、南方、北方に庄屋各1名、年寄2名をおき、浦方には年寄2名をおいた。南方庄屋に原藤右衛門、

北方庄屋に棕橋源左衛門が慶長期よりつとめ、享保期より浦方年寄として赤井久太夫が就いた。この体制が明治維新まで継続する。赤井久太夫は嘉永4年(1851)頃から庄屋格となった。もっとも正式には藤右衛門と源左衛門が春木村庄屋として浦方兼務で両者合議の形で村を代表した。また貢租収納にあたっては南方と北方の二分した算用帳を作成し、宗門改めについては陸方と浦方に分けて宗門改帳を作成した。

さて、本村はかつて中村哲氏⁽¹⁾によって畿内先進地域と位置づけられ研究の対象とされた地である。氏は封建支配体制が強固であった岸和田藩領にあって本村は文化期—19世紀初頭を境にして急速な変化がみられ農民経済の安定的発展が可能になった。その基本的条件は農業生産力と社会的分業(農民的市場の確立)の発展であり、もっとも条件の悪い貧農層においても農民的剰余の確保が可能となったと説くのである。

本稿は原家史料の宗門改帳を分析して、このような性格を有する本村の近世後期の人口構造を明らかにする。浦方史料が散佚して全体像を導き得ないのが残念であるが、しかし「就宗旨御改指出帳」という史料を用いて天保～嘉永期にかけての人口移動のミクロな内容が明らかにされるであろう。

2. 春木村人口の趨勢

宗門改帳によって陸方・浦方および全村の動向をみよう。表1に示すとおりである。筆者の統計は各年次の「宗旨御改判形帳」によっている。文久3年分は破損が著しく戸数は判明しない。嘉永4年浦方分は陸方分に人口のみが記載されているものによっている。Nと付したのは中村哲氏の論考によるものである。氏は原家史料によるとのみあって具体的に依拠した史料名が不明なのが残念である。嘉永4年分は陸方戸数が112戸で筆者の統計113戸と近似であるので全体の趨勢を知る上では有効であろう。

陸方からみると、戸数は享保元年(1716)104戸から嘉永4年113戸へ増加する、40年後の宝暦5年(1755)に115戸へ増加し、安永8年(1779)106戸と減少するものの、この段階で110戸台規模になりこれが100年間継続したものである。人口は、享保元年557人で、宝暦5年(1755)戸数の増加と反対に

表1 春木村人口の趨勢

年次	出典	陸方			浦方		全村		指数				
		戸数	人口		戸数	人口	戸数	人口	人口			戸数 全村	
			男	女					計	陸方	浦方		全村
享保元 1716		104	297	260	557					100.0			
寛保4 45	N				513					92.1			
宝暦5 55		115	249	265	514					93.3			
6 56	N				540		471		1,011	96.9	100.0	100.0	
明和元 64	N	115			473	109	461	224	934	85.7	97.9	92.4	100.0
4 67		111	236	259	495					88.9			
安永8 79		106	226	231	457					82.0			
天明6 86	N				432		479		911	77.6	101.7	90.1	
文化12 1815		110	264	286	550					98.7			
13 16	N					138							
文政10 27		112	244	281	525					94.3			
嘉永4 51		113	221	248	469		883		1,352	84.2	187.5	133.7	
-	N	112			469	177	883	299	1,352			133.7	133.5
文久3 63			204	247	451					81.0			
明治8 75	N							292	1,305			129.1	130.4
12 79	N							334	1,434			141.8	149.1
18 85	N							355	1,605			158.8	158.5

備考：原家史料「宗旨御改判形帳」より作成

Nは中村哲「近世先進地域の農業構造」(『京都大学人文科学研究所調査報告』21号.1965)による。

514人に減少し、63年後の安永8年(1779)には457人にまで減少する。36年後の文化12年(1815)550人に増加するが再び下降をはじめ48年後の文久3年(1863)には451人にまで減少する。男子は297人から204人と31パーセント余も減少するのに対して、女子は260人から途中文化12年には286人へと増加し、文久3年には247人と5パーセントの減少にとどまるのが対照的である。

浦方は、専ら中村氏の論考によるが、戸数人口とも増加する。すなわち戸数は明和元年(1764)109戸から52年後の文化13年(1816)に138戸へ増加し、47年後の嘉永4年177戸へ増加する。62パーセント余の増加である。人口は宝暦6年471人が明和元年461人へ減少するものの、天明6年479人と同規模を維持する。その後65年後の嘉永4年には883人へと増加する。実に87パーセントの増加率である。これは、中村氏が本村の経済構造の変化を19世紀初頭・文

表2 社会的分業

	明治8年		明治10年	
	実数	構成比	実数	構成比
農業	272	26.9	265	29.4
工業	2	0.2	4	0.4
商業	9	0.9	9	1.0
雑業	725	71.6	616	68.4
医	2	0.2	3	0.3
僧	3カ	0.3	3	0.3
合計	1,013	100.0	900	100.0

備考：表1、中村氏論考による。

化期を割期としているが、文化13年戸数138戸への増加がこの成長を説明するものかも知れない。

全村を通観すると、戸数は明和元年（1864）224戸から87年後嘉永4年299戸へ増加する。33パーセント余の増加である。さらに明治期に至り12年（1879）に334戸、18年（1885）は355戸に増加する。人口は宝暦6年1011人から明和元年934人に減少し、さらに30年後天明6年（1886）911人に減少する。しかしその後65年の嘉永4年には1352人に増加する。明治期に至り8年に1305人と減少するものの12年1434人、18年1605人へと増加する。全村人口の増加は正に浦方人口の増加に支えられたものといつてよい。

これは浦方における非農業人口の著しい増加があったものと考えられ、中村氏は明治初年春木村は農村といえない状態にあったと説くとおりであったであろう。表2に示すとおり農業従事者の占める割合は明治8年（1875）は26.9パーセント、明治10年29.4パーセントであった。

つぎに毎月指出帳によって天保10年（1839）から嘉永4年に至る12年間の動きをみよう。毎月指出帳は後述のように毎日の出生と死亡の記録すなわち自然的増減と流入と流出の記録すなわち社会的増減を知ることができ、これにより最終の嘉永4年の人口から逆算して12年間の動向を知ることができる。

まず陸方については表3・1に示すとおりである。これによれば自然的増加の年次は8年ありこの内弘化4人の11人が最大であり残り7年は平均5人の増加であった。また自然的減少の年次は4年あり、天保11年（1840）の4

表 3・1 人口の趨勢II (陸方)

	自然的増減			社会的増減			総計			帳外れ	人口	指数
	出生	死亡	増減	流入	流出	差引	増加	減少	差引			
天保10 1839											397	
11 40	1	5	△ 4	6	1	5	7	6	1		398	100.3
12 41	9	5	4	1	3	△ 2	10	8	2		400	100.8
13 42	12	7	5	4	3	1	16	10	6	1	405	102.0
14 43	7	8	△ 1	4	6	△ 2	11	14	△ 3		402	101.2
弘化 ¹⁵ ₁ 44	13	9	4	1	2	△ 1	14	11	3		405	102.0
2 45	18	13	5	10	4	6	28	17	11		416	104.8
3 46	8	9	△ 1	6	5	1	14	14	0		416	104.8
4 47	19	8	11	4	2	2	23	10	13		429	108.1
嘉永 ⁵ ₁ 48	18	19	△ 1	2	4	△ 2	20	23	△ 3		426	107.3
2 49	16	12	4	7	2	5	23	14	9		435	109.6
3 50	14	6	8	11	3	8	25	9	16	1	450	113.4
4 51	12	8	4	27	6	21	39	14	25	6	469	118.1
合計	147	109	38	83	41	42	230	150	80			

人を最大として他の年次は1人の減少である。この結果12年間に累計38人の自然的増加をみたことになる。また社会的増加についてみると、増加の年次は8年で、嘉永4年の21人を別として、嘉永3年(1850)の8人・弘化2年(1845)6人・天保11年と嘉永2年(1849)5人・弘化4年(1847)2人の他天保13年と弘化3年は1人であった。減少の年次は4年で弘化元年(1844)の1人の他は2人であった。この結果42人の社会的増加をみることになり、38人の自然的増加を合計して12年間に80人の増加をみる。ただしここでは、嘉永4年に6人の天保13年(1842)と嘉永3年の各1人の「帳面より除く」という帳外れ—宗門改帳よりの除籍記載があり⁽²⁾実質72人の増加となる。天保10年を100.0とすると本村人口は逡増を続け嘉永4年に118.1にまで増加する。

つぎに浦方について示すと表3・2のとおりである。まず自然的増減についてみると、天保11年1人の弘化元年の2人の自然的減少をみる他は増加である。すなわち弘化4年の23人を最大とし、天保12年の2人、同14年の4人・弘化3年の9人の他6年は10人以上の増加で112人の自然的増加をみることになる。社会的増減についてみると嘉永4年に4人の減少をみる他は、天保

表 3・2 人口の趨勢II (浦方)

	自然的増減			社会的増減			総 計			人口	指数
	出生	死亡	増減	流入	流出	増減	増加	減少	差引		
天保10 1839										748	100.0
11 40	4	5	△ 1	2	2	0	6	7	△ 1	747	99.9
12 41	15	13	2	6	0	6	21	13	8	775	100.9
13 42	18	4	14	5	5	0	23	9	14	769	102.8
14 43	18	14	4	5	4	1	23	18	5	774	103.5
弘化 ¹⁵ ₁ 44	18	20	△ 2	1	1	0	19	21	△ 2	772	103.2
2 45	38	24	14	6	5	1	44	29	15	787	105.2
3 46	21	12	9	12	5	7	33	17	16	803	107.4
4 47	30	7	23	2	2	0	32	9	23	826	110.4
嘉永 ⁵ ₁ 48	27	15	12	4	4	0	31	19	12	838	112.0
2 49	24	11	13	11	1	10	35	12	23	861	115.1
3 50	25	15	10	9	8	1	34	23	11	872	116.6
4 51	31	16	15	19	23	△ 4	50	39	11	883	118.0
合 計	269	156	113	82	60	22	350	215	135		
内 結婚関係				43	27						

11年・同13年・弘化元年・嘉永元年の0人の他6年は増加で嘉永2年の10人を最大とする。12年間で22人の社会的増加をみたことになる。なおこの社会的増減の内養子縁組を含む結婚関係（不縁のための帰村・出村を含む）による流入は82人中43人、流出は60人中27人であった。残り48～55パーセントがそれ以外の移動であった。以上の自然的増減と社会的増減を総合すると12年間に135人の増加をみることになる。これにより天保10年を指数100.00とすると嘉永4年には118.0にまで増加する。この増加率は陸方の118.1と同率である。なお陸方の増加の47.5パーセントが自然的増加によるものであったのに対して浦方は83.7パーセントを占めるのが特徴的である。

3. 春木村人口の構成

宗門改帳によって、世帯規模・性比・年齢別構成といった人口静態についてみよう。宗門改帳が遺されている陸方が中心になる。

表 4・1 人口の構成

年次	出典	世帯規模			性比 陸方
		陸方	浦方	全村	
享保元	1716	人 5.36	人	人	114.2
寛保4	45	N			
宝暦5	55	4.47			94.0
6	56	N			
明和元	64	N	4.23	4.17	
4	67	4.46			91.1
安永8	79	4.31			97.8
天明6	86	N			
文化12	1815	5.00			92.3
13	16	N			
文政10	27	4.69			86.8
嘉永4	51	4.15			89.1
		N	4.19	4.99	4.52
文久3	63				82.6
明治8	75	N		4.47	
12	79	N		4.29	
18	85	N		4.52	

(世帯規模)

世帯規模について示すと表 4・1 のとおりである。先ず陸方について享保元年5.36人から嘉永4年4.15人に推移する。(中村哲氏の研究によれば4.19人)ここでは表1に示すとおり戸数が115~106戸で推移するのに対し、人口が557~457人と変動することに従っている。浦方については中村データによれば明和元年4.23人、嘉永4年4.99人で、ここでは浦方戸数109戸から177戸へ増加するが、人口は461人から883人と戸数の増加率62パーセントに対して人口は92パーセントとそれを上回る増加があったからである。(表1)全村については明和元年4.17人から嘉永4年4.52人と増加する。これは明治初期(明治8年4.47人、同18年4.52人)と同規模である。

(性比)

女100人に対する男の比率は男女別人口が分かる陸方しか明らかでないが、表 4・1 に示すとおり享保4年114.2から文久3年82.6へと低下する。この間

表4・2 年齢別構成

年 代 年 齡 階 層	享保元年		宝暦五年		明和四年		安永八年		文化十二年		文政十年		嘉永四年	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1歳—5歳	29	21	23	22	17	25	14	16	31	25	34	23	26	28
6—10	25	23	21	17	23	22	14	12	17	30	22	21	21	25
11—15	16	16	14	14	23	22	24	20	35	20	28	27	15	15
16—20	26	22	16	21	16	17	24	26	19	30	30	22	20	21
21—25	30	21	24	15	18	17	18	23	30	24	20	20	19	29
26—30	24	29	25	31	14	19	23	19	22	32	15	23	17	19
31—35	25	21	23	23	13	15	14	11	15	9	36	18	22	21
36—40	19	17	18	22	22	24	9	17	21	13	24	19	24	20
41—45	16	15	20	24	22	22	11	10	11	12	9	20	12	17
46—50	22	9	17	14	17	15	14	6	12	11	10	24	13	11
51—55	10	18	8	7	14	15	15	23	14	19	14	7	11	9
56—60	16	11	8	13	14	10	17	10	14	13	10	9	6	12
61—65	13	10	8	10	4	9	11	18	10	15	13	8	9	12
66—70	10	16	9	16	8	9	13	6	6	11	14	8	4	3
71—75	5	3	4	7	6	7	3	11	4	3	4	3	2	3
76—80	7	4	6	3	0	7	1	2	1	3	5	2	0	1
81—85	2	1	4	4	2	3	0	1	2	3	3	0	0	2
86—90	2	2	0	2	1	1	1	0	0	3	0	0	0	0
91—	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	294	260	249	265	236	259	226	231	264	286	244	281	221	248

100を超えた年次は1回もなく常に女子人口が男子人口を上回っていたといえることができる。この性比の不均衡が陸方人口の低下を導いているといつてよからう。

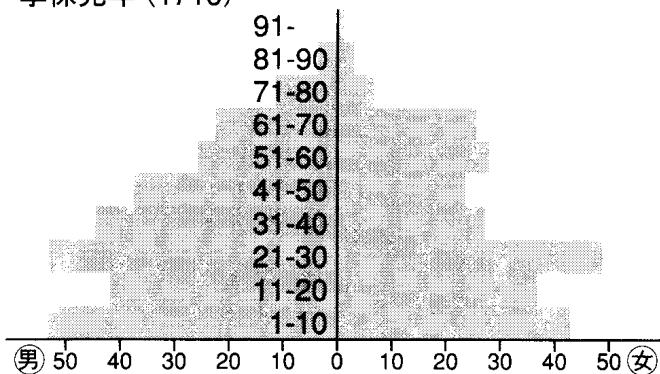
(年齢別構成)

陸方の年齢別構成について鶴井貞二の研究⁽³⁾により示せば表4・2、図1のとおりである。

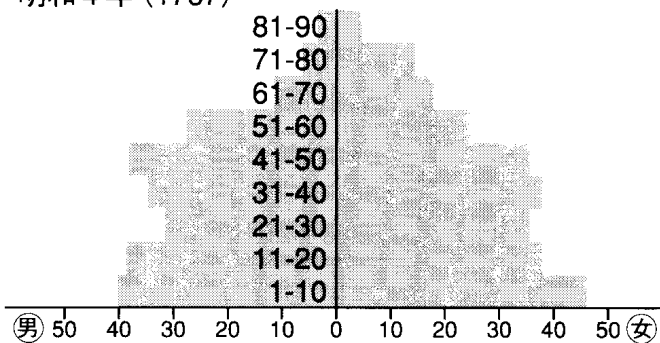
本村では明和4年・安永8年を除き人口再生産の基底層である1～5歳層が最大もしくは次位の規模であるが、明和4年では4位、安永8年では5位

図 1

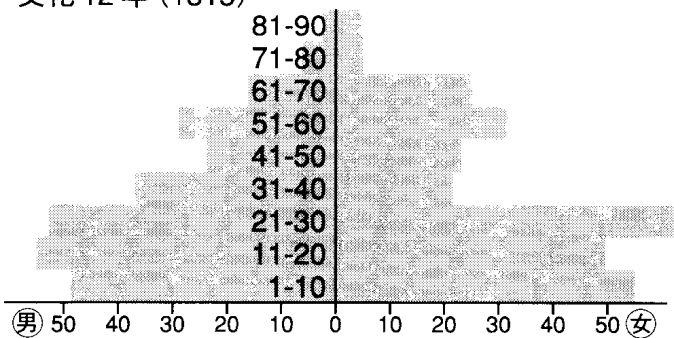
享保元年 (1716)



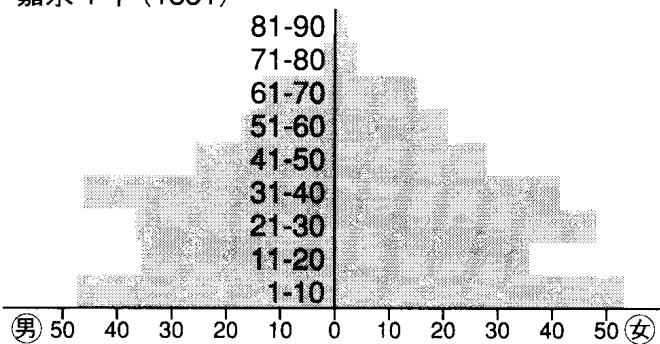
明和 4 年 (1767)



文化 12 年 (1815)



嘉永 4 年 (1851)



の規模であり、これがそのまま次回史料の人口の減少に連る。また全体としてこの層と同規模の層が45歳までの他の層にもみられ、陸方人口の停滞傾向を説明するものとなるのである。図1は10歳毎の人口ピラミッドであるが、明和4年が皮肉にもベル型に近い整った形状を有する他は、いずれも不均衡な形状をとり本村人口の趨勢を物語るものとなるのである。

4. 出生と死亡

岸和田領では宗門改帳とは別に毎月指出控帳が作成された村があり、本村にもこの種の史料が遺っておりそれにより出生と死亡の実態について窺う。この史料については筆者も既に紹介⁽⁴⁾しているが春木村（浦方）の記載を列示してみよう。

庚 天保十一年	就宗旨御改指出帳	子正月晦日
		泉州南郡 春木浦

覚

一 浄土宗當村西福寺旦那 彦左衛門組五郎作 廿五歳 女 房

此者出生岸和田村親平右衛門代々浄土宗同村
西方寺旦那而御座候得共 当子正月右親元方
縁付二呼入申候

一 宗門旦那寺右同断 伝左衛門組庄蔵娘
壹 歳 み よ

此者當子正月十三日出生仕候

↗

右書付之通相違無甲御座候以上

春木村 庄屋

子正月 晦日 同 浦 年寄

宗旨
御奉行様

覚

一 与次兵衛組源蔵 後 家

一 後家娘 ふ し

↗ 式人 右之者野村領筋違角屋庄七
借家へ當子二月兩名引越參申候
組頭久助父 七拾三歳 久 蔵

此者當子二月十一日死去仕候

一 宗門旦那寺右同断 右同人娘
壹 歳 き よ

此者當子二月十八日出生仕候

↗

右書付之通相違無御座候以上

子二月 晦日

覚

一 當三月四五六七月分一人も出入無御座候以上

子七月晦日 但一月に一状々作候事

覚

一 一向宗 加守村出作
春木南分 西性寺旦那 組頭長八父 六拾六歳 栄 蔵

此者當子八月十八日死去仕候

- 一 浄土宗當村西福寺旦那 甚左衛門組利助
三拾六歳 女 房
 此者當子八月廿一日死去仕候
- 一 宗門旦那寺右同断 茂兵衛組半左衛門伴
老 歳 定 八
 此者當子八月廿六日出生仕候

↗

右書付之通相違無御座候以上

子八月 晦日

覚

- 一 當月老入茂出入無之候以上
 子九月 晦日
 十月

ここでは出生や死亡、来村や出村などの動きを毎月1回宗旨奉行に報告していたことが分かり、その控を一冊に纏めたものが本史料である。天保11年正月から嘉永4年12月までの12年間に記録されている。塔原村をはじめこの地方の村方では亥年作成の宗門改帳が12年毎に残存⁽⁴⁾されていることから、毎年1回行われる宗門改めと宗門改帳の作成がこの毎月の報告という形でなされ、12年毎に宗門改帳が作成された可能性が高い。幕府の全国人口の調査が子・午の6年毎に行われたことから幕府へ報告の前年の亥年に各村から宗門改帳を提出させ領内人口の集計を行ったと考えることもできよう。

A. 出生

この史料によって春木村の出生についてみよう。

まず表5・1によって陸方の出生をみよう。天保11年から嘉永4年の12年間最大19人最小1人の出生であり合計147人になる。天保11年の1人は例外で7～19人出生している。年平均12.3人である。出生率は天保11年の2.57パー

表 5・1 出生と死亡（陸方）

	人 口		実 数			比 率			
			出 生	死 亡	乳児死亡	出生率	死亡率	増加率	乳児死亡率
	人	人	人	人	‰	‰	‰	‰	
天保11	1840	398	1	5		2.57	12.56	△10.05	
12	41	400	9	5		22.50	12.50	10.00	
13	42	405	12	7		29.63	17.28	12.35	
14	43	402	7	8	1	17.41	19.90	△8.49	142.86
弘化 ¹⁵ ₁	44	405	13	9	1	32.10	22.22	9.87	76.92
2	45	416	18	13	2	43.27	31.25	12.02	111.11
3	46	416	8	9		19.23	21.63	△2.40	
4	47	429	19	8		44.29	18.65	20.98	
嘉永 ⁵ ₁	48	426	18	19	2	42.25	44.60	△2.35	111.11
2	49	435	16	12		36.78	27.59	9.20	
3	50	450	14	6		31.11	13.33	17.78	
4	51	469	12	8		25.59	17.06	8.53	
合 計 ①		5051	147	109	6	29.10	21.58	7.52	40.81
平 均 ②			12.3	9.1		28.89	21.54	7.35	
③		421			0.50	29.22	21.62	7.60	40.65

ミルを別として天保14年の7人、17.41パーミルを最小とし弘化4年の19人、44.29パーミルが最大であった。平均出生率は統計の方法で区々であり、各年の出生率の平均値では28.89、12年間の統計では29.10、12年の年平均421人に対し年平均12.3人の比率29.22パーミルである。

つぎに浦方についてみると表5・2のとおりである。ここでは天保11年が4人の他は天保12年15人から弘化2年38人まで12年間合計して269人、年平均22.4人の出生であった。これに対する出生率は同じ天保11年の5.35パーミルを別にして天保12年の19.87パーミルから弘化2年の48.28パーミルを上下する。各年次の出生率の平均は27.49パーミル、12年間の人口と出生の総和9687人に対する269人の出生率27.76パーミル、また年平均人口807人に対する年平均出生224人の出生率は27.76パーミルであり、陸方が最大1.46ポイント上回る。

(出生の月・出生の季節)

陸方・陰暦についてみると、12年間の内で最大は8月の26人、ついで9月

表5・2 出生と死亡（浦方）

	人 口	実 数			比 率				
		出 生	死 亡	乳児死亡	出生率	死亡率	増加率	乳児死亡率	
	人	人	人	人	‰	‰	‰	‰	
天保11	1840	747	4	5		5.35	6.69	△1.34	
12	41	755	15	13		19.87	17.22	2.65	
13	42	769	18	14		23.41	18.21	5.20	
14	43	774	18	14	1	23.26	18.09	5.17	55.56
弘化 ¹⁵ ₁	44	772	18	20	1	23.32	25.91	△2.59	55.56
2	45	787	38	24		48.28	30.50	17.79	
3	46	803	21	12	3	26.15	14.94	11.21	142.86
4	47	826	30	7		36.32	8.47	27.85	
嘉永 ⁵ ₁	48	838	27	15	1	32.22	17.90	9.55	37.03
2	49	861	24	11		27.87	12.78	15.10	
3	50	872	25	11		28.67	12.61	16.06	
4	51	883	31	16	2	35.11	18.12	16.99	64.52
合 計 ①	9687	269	156	8		27.76	16.10		29.63
平 均 ②			224	13.0		27.49	16.79	10.70	
③	807			0.67		27.76	16.11		29.76

の19人、最小は閏月を除くと2月の7人、ついで3月の9人で他は12～10人である。陽暦にすると、最大は9月の26人で10月の16人、2月の15人がこれにつき、最小は3月の5人で、他は13～8人である。1月平均12.3人である。（表5・3）

つぎに表5・4により季節別に区分してみよう。A区分として1～3月・4～6月・7～9月・10～12月と4区分する。B区分として2～4月・5～7月・8～10月・11～1月、C区分として3～5月・6～8月・9～11月・12～2月と4区分する。この内最大は陰暦では7～9月と8～11月の55人である。ついで6～8月の47人、9～11月の41人である。出生の少ないのは2～4月の26人、12～2月の28人である。比率にして55人が37.4パーセントであり、25パーセント以上の出生数を有するのは16区分中4区分ということになる。本村では陰暦にすると6～11月にかけて88人全体で60パーセントが出生している。陽暦に換えてみると、最大は9～11月の55人で8～10月の50人がこれにつぐ。3位は7～9月の44人である。比率からするとこの3区分が略々30パーセント以上で、3～5月が17.0、2～4月が19.7パーセントと少ない。

表 5・3 出生の月（陸方）

月	陰 曆			陽 曆		
	男	女	計	男	女	計
1	7	4	11	7	3	10
2	4	3	7	9	6	15
3	3	6	9	2	3	5
4	7	3	10	3	6	9
閏 4	0	0	0	—	—	—
5	6	6	12	8	3	11
閏 5	0	0	0	—	—	—
6	5	6	11	6	6	12
7	5	5	10	3	7	10
8	13	13	26	4	4	8
9	9	10	19	14	12	26
10	4	6	10	8	8	16
11	4	8	12	6	7	13
12	6	4	10	3	9	12
計	73	74	147	73	74	147

表 5・4 出生の季節（陸方）

区分	月	陰 曆		陽 曆	
		実 数	比 率	実 数	比 率
Ⓐ	1 — 3	27	18.4%	30	20.4%
	4 — 6	33	22.4	32	21.8
	7 — 9	55	37.4	44	29.9
	10 — 12	32	21.8	41	27.9
Ⓑ	2 — 4	26	17.7	29	19.7
	5 — 7	33	22.4	33	22.4
	8 — 10	55	37.4	50	34.0
	11 — 1	33	22.4	35	23.8
Ⓒ	3 — 5	31	21.1	25	17.0
	6 — 8	47	32.0	30	20.4
	9 — 11	41	27.9	55	37.4
	12 — 2	28	19.0	37	25.2

表 5・5 出生の月 (浦方)

月	陰 曆			陽 曆		
	男	女	計	男	女	計
1	15	7	22	13	10	23
2	8	10	18	12	9	21
3	11	5	16	9	9	18
4	11	8	19	14	5	19
閏 4	2	0	2	—	—	—
5	6	8	14	8	9	17
閏 5	4	1	5	—	—	—
6	14	9	23	6	8	14
7	6	13	19	18	8	26
8	12	13	25	8	16	24
9	22	11	33	13	14	27
10	13	14	27	22	12	34
11	13	12	25	11	14	25
12	9	12	21	10	11	21
計	144	125	269	144	125	269

従って7～11月にかけての出産が合計73人、比率にして47.7パーセントと多いといふことができる。

浦方—表5・5によって浦方の月別出生数をみよう。陰曆からみるとここでは1年しかない閏5月の5人が目につくが9月の33人が最大である。2位は10月の27人、8・11月の25人がこれにつぐ。少ないのは5月の14人、ついで3月の16人である。陽曆に換えると10月の34人が最大で、9月の27人、7月の26人、11月の25人と続く。最小は6月の14人、5月の17人である。月平均は22.4人であるからこの水準を上回るのは1・7・8・9・10・11の6月である。

陸方と同よう区分して示すと表5・6のとおりである。陰曆からみると最大は8～10月、9～11月の85人の31.6パーセントが突出している。ついで7～9月の77人28.6パーセント、10～12月の73人27.1パーセントである。これから7～12月にかけての出産が多く、269人中150人、55.8パーセントを占める。陽曆に換えてみると9～10月の86人、8～10月の85人が最大で10～12月

表 5・6 出生の季節（浦方）

区分	月	陰 曆		陽 曆	
		実 数	比 率	実 数	比 率
㊶	1 - 3	56	20.8	62	23.0
	4 - 6	63	23.4	50	18.6
	7 - 9	77	28.6	77	28.6
	10 - 12	73	27.1	80	29.7
㊷	2 - 4	55	20.4	58	21.6
	5 - 7	61	22.7	57	21.2
	8 - 10	85	31.6	85	31.6
	11 - 1	68	25.3	69	25.7
㊸	3 - 5	56	20.8	54	20.1
	6 - 8	67	24.9	64	23.8
	9 - 11	85	31.6	86	32.0
	12 - 2	61	22.7	65	24.2

の80人，7～9月の77人がこれにつぐ。それぞれ32.0～28.6パーセントの比率である。最小は4～6月の50人，18.6パーセントである。総合すると本村出生は7～11月にかけては多いということになる。この5ヵ月の出生数は136人で全体の50.6パーセントということになる。

丙午年の出生－弘化3年は干支が丙午にあたる。丙午年出産を回避しないように前年から注意がなされてきたが，陸方では12年間平均出生12.3人（出生率28.9パーミル）中8人（19.2パーミル）で下位から3位にあった。浦方では年平均22.4人（27.5パーミル）中21人（26.2パーミル）とやや良好であった。これを山間部に位置する塔原が平均出生5.1人（出生率31.5パーミル）に対して弘化3年は8人（47.1パーミル）⁽⁵⁾で俗信と別に高い出生率をみるのと対照的である。ただし陸方は平均値に接近し，下位より6位と陸方浦方共全くの最下位にあったという訳ではない。

B. 死亡

前掲表5・1によって死亡の推移についてみよう。まず陸方についてみると，天保11年から嘉永4年迄の12年間合計109人の死亡があった。嘉永元年の

表 6・1 死亡の月（陸方）

月	陰 曆			陽 曆		
	男	女	計	男	女	計
1	3	4	7	4	5	9
2	4	6	10	4	4	8
3	4	2	6	5	7	12
4	3	3	6	3	2	5
閏 4	0	1	1	—	—	—
5	3	4	7	4	1	5
閏 5	0	0	0	—	—	—
6	5	5	10	3	6	9
7	6	6	12	5	3	8
8	2	6	8	7	5	12
9	3	7	10	2	8	10
10	4	8	12	3	7	10
11	2	7	9	3	5	8
12	7	4	11	2	10	12
計	46	63	109	45	63	108

19人を最高に天保11・12年の5人を最小とする，年平均9.1人となる。死亡率は天保12年の12.50パーミルを最小とし，嘉永元年の44.60パーミルを最小とする。年平均の死亡率は21.62～21.58パーミルである。各年次の死亡率平均は21.54，12年総計の平均では21.58，年平均人口421に対し9.1人の死亡者で比べると21.62になる。

つき表5・2によって浦方についてみよう。ここでは嘉永2年の24人が最大で，天保11年の5人が最小である。12年間合計して156人，年平均13.0人の死亡者数であった。死亡率は弘化2年の30.5パーミルを最大とし，天保11年の6.69パーミルを最小とする。平均死亡率についてみると，①各年次死亡率の平均は16.79パーミル，②12年間合計した人口と死亡者の平均は16.79，③年平均の人口と死亡16.11パーミルである。陸方と比較して出生率は1.4～1.3ポイント低いが，死亡率は5.5～4.8ポイントさらに低く，人口の自然増加について陸方の7.5パーミル水準を上回る11.6パーミルとなるのである。

表 6・2 死亡の季節（陸方）

区分	月	陰 曆		陽 曆	
		実 数	比 率	実 数	比 率
㉠	1 - 3	23	21.1	29	26.6
	4 - 6	23	21.1	19	17.4
	7 - 9	31	28.4	30	27.5
	10 - 12	32	29.4	30	27.5
㉡	2 - 4	23	21.1	25	22.9
	5 - 7	29	26.6	22	20.2
	8 - 10	30	27.5	32	29.4
	11 - 1	27	24.8	29	26.6
㉢	3 - 5	20	18.3	22	20.2
	6 - 8	30	27.5	29	26.6
	9 - 11	31	28.4	28	25.7
	12 - 2	27	24.8	28	35.7

閏4月は4月に加える。

（死亡の月・死亡の季節）

陸方—表 6・1 に陸方の天保11年から嘉永4年に至る12年分を月別に示す。陰曆についてみれば7月と10月の12人が最も多く、3月と4月の6人が最も少ない。（閏月を除く）陽曆に直すと、1例が日付が不明の為男子1人が置換不能であるが、3月8月12月が12人で最大で4月と5月が5人で最小である。1月平均9.1人の死亡である。

表 6・2 によって季節別の死亡をみよう。出生と同じように㉠、㉡、㉢に区分する。陰曆で多いのは10～12月の32人、ついで7～9月・9～11月の31人、さらに6～8月と8～10月の30人である。比率からすれば、それぞれ29.4, 28.4, 27.5パーセントである。反対に少ないのは3～5月の20人（18.3パーセント）ついで1～3月・4～6月の23人（21.1パーセント）である。このことから陸方の死亡は5～12月にかけてが83人で多いということになる。陽曆に直すと、8～10月の32人（29.4パーセント）が最大で、ついで7～9月と10～12月の30人（27.5パーセント）がこれにつぐ。陽曆では7月から12月にかけての死亡が多く60人（55.6パーセント）を数える。

浦方—表 6・3 に浦方の月別死亡数をあげる。陰曆についてみると、9月・

表 6・3 死亡の月（浦方）

月	陰 曆			陽 曆		
	男	女	計	男	女	計
1	6	7	13	2	8	10
2	5	6	11	11	9	20
3	5	5	10	5	5	10
4	4	5	9	3	3	6
閏 4	1	0	1	—	—	—
5	4	7	11	5	5	10
閏 5	1	1	2	—	—	—
6	9	6	15	6	9	15
7	6	5	11	6	6	12
8	6	10	16	10	5	15
9	10	7	17	6	10	16
10	7	8	15	7	5	12
11	3	5	8	7	11	18
12	7	10	17	6	6	12
計	74	82	156	74	82	156

12月が17人で最も多くついで8月の16人，6月と10月の15人がこれにつぐ。少ないのは11月の8人で4月の9人，3月の10人がこれにつぐ。陽曆で見ると，2月の20人が最も多く11月の18人がこれにつぐ。反対に少ないのは4月の6人である。ここでは月平均死亡は13人である。

つき季節別死亡を示すと表6・4のとおりである。まず陰曆からみると，8～10月の48人（30.8パーセント）が最大で7～9月の44人（28.4パーセント）がこれにつぐ。最小は2～4月の31人（19.9パーセント）で3～5月の33人（21.2パーセント），1～3月の34人（21.8パーセント）がこれにつぐ。ここでは8月から10月にかけてが目につく。比較的平均化され1月から5月にかけてが56人で少ないということが出来る。陽曆に直すと，9～11月の46人（29.5パーセント）が最大で7～9月と8～10月43人（27.6パーセント）10～12月，6～8月，12～2月の42人（26.9パーセント）がこれにつぐ。ここでも平均化され，3～5月の26人が最小で，4～6月の31人がこれにつぐ。陸方，浦方共通して夏季から冬季にかけての死亡が多く，春季が比較的少な

表 6・4 死亡の季節（浦方）

区分	月	陰 暦		陽 暦	
		実 数	比 率	実 数	比 率
㊶	1 - 3	34	21.8	40	25.6
	4 - 6	38	24.4	31	19.9
	7 - 9	44	28.2	43	27.6
	10 - 12	40	25.6	42	26.9
㊷	2 - 4	31	19.9	36	23.1
	5 - 7	39	25.0	37	23.7
	8 - 10	48	30.8	43	27.6
	11 - 1	38	24.4	40	25.6
㊸	3 - 5	33	21.2	26	16.7
	6 - 8	42	26.9	42	26.9
	9 - 11	40	25.6	46	29.5
	12 - 2	41	26.3	42	26.9

* 閏4月は4月、閏5月は5月に加える。

表 6・5 死亡の集中

期 間			死 亡 数				
自	至	日数	死亡数	内 訳			
				男	年 齢	女	年 齢
天保2-3-6	天保2-4-12	37	5	3	3, 48, 66	3	3, 3
弘化元-12-22	弘化元-12-28	7	7	4	2, 4, 6, 40	3	5, 7, 32
2-2-5	2-2-17	13	5	3	3, 59, 61	2	3, 68
5-3	6-27	55	9	4	4, 7, 45, 72	5	18, 51, 56, 64, 71
3-9-26	9-28	3	4	2	2, 63	2	2, 10
嘉永元-8-15	嘉永元-8-25	11	8	2	2, 63	6	2, 3, 5, 6, 6, 23

いということが出来る。これは出生については夏季から秋季にかけてが多く、冬季から春季にかけてが少ないという現象と差異があるということに気付く。

また2月以内で死亡が集中する期間が6例ある。表6・5のとおりである。この内特に集中度が激しいのが弘化元年12月22日から28日迄の7日間に7人が、弘化3年9月26日から28日迄の3日間に4人である。また弘化2年5月3日から6月27日迄の55日間であるが9人が死亡している。また死亡年齢は史料記載のまま（満年齢に換算していない）であるが、10歳以下層は38人中

表 6・6 死亡年齢

死亡年齢 (歳未満)	陸 方				浦 方			
	実 数			構成比	実 数			構成比
	男	女	計		男	女	計	
0 - 5	7	12	19	17.4	14	22	36	23.1
5 - 10	1	0	1	0.9	3	6	9	5.8
0 - 10	8	12	20	18.3	17	28	45	28.8
20	0	5	5	4.6	0	7	7	4.5
30	3	7	10	9.2	5	8	13	8.3
40	5	5	10	9.2	5	8	13	8.3
50	5	8	13	11.9	9	3	12	7.7
60	11	5	16	14.7	14	7	21	13.5
70	7	5	12	11.0	15	8	23	14.7
80	3	6	9	8.3	8	7	15	9.6
90	3	4	7	6.4	1	5	6	3.8
90歳以上	0	0	0	0.0	0	1	1	0.6
不 明	1	6	7	6.4				
計	46	63	109	100.0	74	82	156	100.0
最高年齢	85	84			84	95		

21人 (55.3パーセント) 60歳以上層が 8人 (21.1パーセント) と全体で76パーセントを占め、気象条件の厳しさや、疫病の流行といった影響をこの層が集中して受けたものと考えられる。

(死亡年齢・乳児死亡)

この史料から得られる最大の利点である死亡の年齢について考えてみたい。なお死亡年齢の算定は死亡年月日と出生年月日が分かる者はこれを差引くことにより、不可能な場合は1歳差引くことによった。これによって10歳毎に区分して示せば表 6・6 のとおりである。

陸方では、10歳未満層が20人で最も多いが、男子のみについてみると60歳未満が11人で最も多く死亡男子の23.9パーセントを占める。女子では5歳未満層の12人が最も多く19.0パーセントである。また60歳以上では男子13人 (30.2パーセント) 女子15人 (23.8パーセント) 全体で28人、25.7パーセントである。ここでは人口増加に大きな影響を与える10歳未満層の割合が同郡塔

表 6・7 乳児死亡 天保11－嘉永 4

	乳児死亡数			出 生			乳児死亡率		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
							%	%	%
陸 方	3	3	6	73	74	147	41.1	40.5	40.8
浦 方	2	6	8	144	125	269	13.9	48.0	29.7
計	5	9	14	227	199	416	22.0	45.2	33.7

原村が約40パーセントを占めるのと対照的⁽⁶⁾である。そして所謂生産年齢層の大部分である10～60歳未満層が男子24人，女子30人，計54人で，それぞれ57.2，47.7，49.5パーセントで塔原村が21.7～22.9パーセントにすぎないのに比べてこの層の死亡の多さが注目される。最高死亡年齢は男子85歳，女子84歳であった。

浦方では，10歳未満層が45人で最も多く全体の28.8パーセントである。男子ではこの層の17人について70歳未満層の15人，60歳未満層の14人である。女子は10歳未満層28人の他は90歳未満まで50歳未満層の3人を除いて5～8人と平準化している。60歳以上の老年層は男子24人，女子27人，合計51人で構成比はそれぞれ32.4，32.9，32.7パーセントであり，陸方より長命の傾向にあるといえよう。最高死亡年齢は男子84歳女子95歳であった。ここでは50歳代の死亡（男子14人，女子7人，合計21人）が目につく。ここでは幼年層，生産年齢層，老年層の死亡がそれぞれ約28，42，30パーセントと接近した数値を示す。（塔原村の場合，40，23，37パーセント）

乳児死亡について示せば表6・7のとおりである。毎年の事例が僅少であるので12年間の出生数合計と乳児死亡数合計による比率によることとする。全例をあげればつぎのとおりである。

陸方・次郎左衛門娘さき（天保13年11月16日出生・翌14年3月25日死亡・5月27日），源之丞娘まつ（天保15年3月21日出生・同年11月24日死亡・7月24日），助右衛門伴為蔵（天保15年4月15日出生・翌弘化2年3月13日死亡・11月19日），文四郎伴楠之助（弘化元年12月18日出生・翌2年3月24日死亡・3月12日），治左衛門娘いと（弘化4年9月21日出生・翌嘉永元年8月18日死亡・11月16日），治兵衛伴由松（嘉永元年7月21日出生・同年8月23日死亡・

31日)以上6例でこの間出生数男73人,女74人であるから乳児死亡率は男41.1,女40.5,全体40.8パーミルということになる。また参考までに5歳未満の死亡例は,男子,1年3月10日,1年10月15日,1年11月15日,2年11月26日の4例である。女子は1年2月15日,1年5月25日,1年5月27日,2年5月2日,2年11月22日,3年1月10日,3年4月24日,3年9月10日と生年不詳の5歳以下の9例である。

浦方一権助娘よつ(天保13年2月20日出生・翌14年正月26日死亡・同年10月24日),茂吉娘つる(天保15年7月25日出生・同年11月7日死亡・3月9日),関左衛門伴作太郎(弘化3年正月3日出生・同年9月27日死亡・9月16日),九郎兵衛娘りき(弘化3年2月22日出生・同年9月28日死亡・7月2日),関左衛門娘まき(嘉永元年4月26日出生・同年8月11日死亡・3月11日)又次郎伴三太郎(嘉永元年6月25日出生・同年8月21日死亡・1月24日),源治娘きよ(嘉永3年7月14日出生・翌4年3月21日死亡・8月1日),吉右衛門娘よね(嘉永4年1月12日出生・同年12月15日死亡・10月25日)の8例である。この間の出生は男144人,女125人で,乳児死亡率は男13.9,女48.0,全体29.7パーミルということになり陸方より低率といえる。また5歳未満は男子は1年-3月15日,6月7日,8月8日,10月3日,2年-1月14日,3月3日,7月1日,3年-1月9日,3月2日(2例)6月16日と出生不詳の2歳未満の12例である。女子は1年-6月6日,9月0日,11月22日,2年-1月18日,5月28日,3年-1月1日,1月16日,5月0日,8月5日,4年-1月11日,2月6日,11月4日と出生不詳の2歳以下3人,3歳以下1人の16例である。

5. おわりに

以上述べたところを要約しておわりとしたい。まず人口の趨勢については,近世中期から陸方では停滞ないし減少の傾向をみせたが,浦方では停滞から増加の傾向をみせたものと思われる。そして天保以降の幕末期にあってはいずれも増加をみせ,これが明治以降の規模に連続したものと思われる。そしてこの幕末期の増加は自然的増加,社会的増加双方よりなされたが,陸方が

同率で増加したのに対して浦方では増加の8割以上が自然的増加であった。

構成についてみると、世帯規模は中期よりの規模が4.1～5.0の幅で推移し、これも近代に連続した。性比については陸方のみしか知りえないが文久期まで女子超過が続く。商業的農業の発展が著しい村落におけるひとつの性格を表すものと思われる。年齢構成は不均衡な構造が続きこれが陸方人口の停滞傾向に影響するものと思われる。

出生と死亡について毎月指出控帳によって幕末12年間の動向を知ることができたが、つぎのとおりである。

①、陸方、浦方共出生率は28～30パーミルであった。出生は陸方では陰暦では6～11月にかけて、陽暦にすると7～11月にかけてが多いということになる。浦方では陽暦で7～11月が多く、陸方と同ようであった。また丙午年出産は山間後進の塔原村においては影響がなかったのに対して陸方では極端に低く、浦方が中位にあった。商業的農業の進展による経済発展が俗信の影響を受けることが多いという事例を見出す。

②、死亡率は陸方では22パーミル、浦方では16～17パーミルであった。出生率が2ポイント陸方が高いのにもかかわらず、死亡率において浦方が5ポイント低いため、自然増加は浦方において高かったのである。

つぎに死亡の時季についてみると、陸方では陰暦で5～12月、陽暦で7～12月にかけてが多い。浦方では陰暦で8～10月、陽暦で6～11月にかけてが多いものの特別に突出した時季は見当たらない。総合すれば出生については夏季から秋季、死亡では夏季から冬季が多い傾向にあった。また死亡が集中する期間がみられるが、これは厳しい気象条件や疫病の流行によるものと思われる、これは10歳以下層や60歳以上層に強く影響した。

死亡年齢についてみれば10歳未満層の死亡が高いけれども、塔原村のように4割を超えるに至らず、生産年齢層、老年層に極端な差はなく、老年層の高さが、幕末期人口の増加に影響したものと思われる。また乳児死亡率は陸方において40.8パーミル、浦方において29.7パーミルで、90パーミルを数える塔原村と比較しても低率で、これが本村人口の再生産に与って力となったものであろう。

附) 本稿は私学研修福祉会による国内研修(平成14年9月～平成15年3月)の成果で

ある。研修を許可された九州産業大学と直接指導を頂いた、大阪府立大学経済学部経済史講座の浅羽良昌教授、岡田光代助教授にお礼申し上げます。

本稿で使用の史料は岸和田市史編さん室架蔵のものである。自由な使用を許された同室各位へお礼申し上げます。

- (1) 中村 哲「近世先進地域の農業構造－和泉国南郡春木村の場合」(『京都大学人文科学研究所調査報告』第21号 京都大学人文科学研究所, 1965年)
- (2) 関山直太郎『近世日本の人口構造』(吉川弘文館, 1957年) 52－53頁。
- (3) 鶴井貞二「畿内における農村構造の一考察－泉州岸和田藩春木村について－」(未刊, 1954年)
- (4) 三浦 忍「近世後期泉州山間農村における人口の再生産について」(武部善人・谷山新良編『産業経済分析』大明堂, 1984年)
——「毎月指出控帳の分析－和泉国塔原村の出生と死亡－」(速水融編『近代移行期の人口と歴史』ミネルヴァ書房 2002年)
- (5) ——「近世泉州岸和田地方の農村人口」(『長崎県立大学論集』34巻4号 2003年)
- (6) ——「毎月指出帳の分析－和泉国塔原村の出生と死亡－」以下塔原村との比較はこれによる。